
悪魔の剣と聖なる少年

クロエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の剣と聖なる少年

【Nコード】

N5123K

【作者名】

クロエ

【あらすじ】

ブラッディムーン…血の月。悪魔が持ってきたとされる石だ。あの試合でもらった剣のせいで俺の人生は狂い始めたんだ…多分ね。

第1話

「おいレックス！まだまだ仕事は終わつとらんぞお！はっはっは！」

ああ…またうるさい俺の上司が喚いてる…。

仕方なく俺は喚いてる上司の方へ走り出した。

「おおレックス！相変わらず走りが速いなあ！？その足、俺に分けてくれんか？」

「……断ります」

「はっはっは！冗談だよ！」

俺はレックス。この『フォーマーグ傭兵団』に入ったばかりの新人だ。得意なことは走り。さっきの上司が言ったように走りはかなり速い。計ったことはないがおそらく100m？は10秒で走れるのではないかと言われたことがある。

とまあ自己紹介は終わりにして、さっさとこの仕事を片付けるか…

「……これで終わりつと…」

そうつぶやいておれは最後の荷物をそこに投げ捨てた。

そしてあのうざい上司が来た。

「おーレックス！仕事が速いな！さすが期待の新人だなあ！？え？」
「……………」

そうだ。俺はなぜか期待の新人とされている。

「両者構え！」

俺は構える…全神経をこの剣に集める…！

「レディイイイファイッツツツツ！」

さきにあつちが動いた。早い！あつという間に後ろに回り込み、斬ろうとしている。

しかし俺もそんなにあつさり斬らせるほどやわじゃない。素早く前方に転がると一番簡単とされている魔法『ファイアボール』たくさん打って相手を牽制した。

ディランは驚いたような顔をした。そりゃそうだろう。いままで俺は魔法を使ってない。不意打ちだったのだ。

ディランは1つ1つ剣で叩き落としていった。

俺はニヤリとほくそ笑んだ。これこそが狙い。相手は火の玉をたたき落とすのに精一杯でスキだらけだ。おれは追加でさらに『ファイアボール』を20発ほど打つといた。

さすがにディランもギョツとしたようだ。ダメージを受けること覚悟で防御の構えをとった。

防御は威力を減らすだけであつて、完全に無効化することはできない。

おれはまたにやっと笑った。これをフォーマーグ団長が見たら悪魔の微笑みと言ったであろう。

俺は一気に接近して後ろに回り込んだ。ディランも気づいたようだ。しかしもう遅かった。

俺はディランのど元に剣を突きつけていた。

歓声があがった。ディランは本当に俺を悪魔と思ったかのような顔をしていた。

そして俺は我に帰った。なんか優勝しちまったぜ？

そこにティレイアの国王が現れた。王女もいた。

「見事であったぞ、レックス殿！これが優勝の証だ。受け取ってくれたまえ」

そういつて国王は剣を差し出した。美しい装飾が施されている。

でも俺の目を引いたのは鏢の中心にはめ込まれている真っ赤な石だった。

国王はそんな俺の目に気づいたのかこう説明した。
「その石は『ブラッディムーン』といってな。悪魔がこの世界に持ってきたとされておる」

ブラッディムーン…血の月。背筋がぞくつとした。
でも受け取らないわけにはいかないものでありがたくもらった。

そうして俺は選手控え室に戻った。俺は気づかなかった。王女がじつと俺のことを見ているのを…。

俺はあの剣をさやから抜き放った。そしてふと思った。この剣名前ねえな。

「うーん…ブラッディブレイドでいいか」

そうして俺はその剣をさやにしまい、また喚いてる上司のもとへダッシュした。

第1話（後書き）

どうもーはじめまして！クロエです！

レックス「作者が意見と感想書けだつてさー。書かないとブラッディムーンがあなたのもとにいくだって…あー怖い怖い」

そんなこといってませんからね！wでも意見・感想は本当に書いてくれると嬉しいです！

これからよろしく願います！

第2話

あーやっと仕事終わったよ…。

あのつるさい上司め…

とか思いながらレックスは自分の寮に戻ってきた。

この寮は新人のための寮だ。だから作りは粗い。

ベッドが堅かったり壁の一部がはがれてたりととにかく粗い。

まあそんなこと思っても変わる訳でもない。めんどくさがって直そうともしないからだ。

「ふう…」

レックスは自分の部屋まで戻ってくるとドアを蹴り開けた。

そしてベッドにダイブした。ベッドに向かってジャンプしている間にレックスはブラッディブレイドとその他諸々を壁に投げ飛ばしていつでも寝れるようにする。

今日はなんか夕食を食べる気がしなかった。

だからレックスはそのまま眠りに落ちた。

気がつけばレックスは不思議なところにたっていた。亜空間、と表

現したらいいのだろうか。

レックスはとりあえず歩き出した。こんなとこに突っ立てても何か
が起きる保証はない。

歩き始めてしばらく時間が経っただろうか。声が聞こえてきた。

「…汝、選ばれし者よ…」

「うわびつくりした！誰！？」

「我は…次の継承者にチカラを授けるもの…」

「…は？」

レックスは声が裏返ってしまった。

まてまて状況が理解できない。

考える暇もなく声は続けた。

「汝次なる『天使の子』…」

「…て、天使の子ってそんなのほんとにあるわけないだろ…？」

『天使の子』…それは天使たちを率いている大天使『ルージユナ』
に選ばれし者のことだ。

同じように『悪魔の子』もいる、らしい。

だが天使の子も悪魔の子もこの世界の者たちは皆信じていない。
おとぎ話だと思っているのだ。

「我は嘘は言わない。汝が次なる『天使の子』だ」

「じゃ、じゃあ天使の子ってなにをするんだ？」

声はおおざっぱに話すぞと言って話し始めた。

天使の子と悪魔の子は100年に一度選ばれ戦う宿命にある。

天使の子が勝てば今のような平和な世界になり、悪魔の子が勝てば悪魔がすむ世界となってしまう。

だが最近では天使の子が連勝していると、声は語った。

「……ということだ。そして次の番は汝だ」

「……………」

「ためらっている暇はない。早くせねばこの世界が悪魔のものになる」

「……やりやあいんだろやりやあ？」

声は満足げに続けた。

「悪魔の子との決戦の地はこのミルソーティアの北にある最果ての地だ。決戦の日は今から6ヶ月後……」

その日までに最果ての地に着けなければ……戦うこともなく世界は先にたどり着いた者のものになる」

レックスは考えた後に言った。

「仲間は？」

「2人まで、だ。汝を含めて3人……」

レックスの心にもう迷いはない。

だから言った。

「いいかげんこの夢の世界から出してくれよ」

声は間をあげると頼んだぞ、といって消えた。

それと同時にこの世界が歪み始めた。

レックスは静かに目を閉じた。そしてすぐに目を開けた。

目の前には粗い作りの壁。どうやら戻って来れたようだ。

レックスはすぐに布団を吹っ飛ばして跳ね起き、窓の外を見た。

真っ暗だった。ということは深夜：脱出するなら今がチャンスだ。

ベッドにダイブするとき投げ捨てたものをすぐに拾い集め身支度を整える。

そしてもう一度窓の外をみた。警備している人が1、2…2人だけか…。

これなら簡単に脱出できそうだ。レックスは速攻でつかい音のなる正体不明の物を作り出し、それをもってそつとドアを開けた。そして素早く音を立てずに階段を駆け下りた。

そして寮の入り口のドアを開けた。

このフォマーグ傭兵団のキャンプは入り口は1つしかない。そこからしか出れないのだ。

周りは森だから突っ切ればなんとかなるかもしれないがさすがにそんなことはしない。

森にはモンスターもいるのだ。とてもじゃないが無理だろう。

おれはそつと入り口に近づいた。そしてさつき速攻で作った正体不明の物を警備の2人に向かって投げつけた。

パチンツ！！！！

凄まじい音と凄まじい光だった。警備の2人は明らかに動揺している。

その隙について俺は一気に駆け出した。音をたてずに全力ダッシュ！

ここから外に出られる道はすっかり覚えている。とりあえず森で野宿なんてしたくないのでレックスは足を緩めなかった。傭兵団の誰かが追ってくるかもしれないし。

そしてやっと森の出口に着いた。ここまでやく2km。無駄に長い。さすがに疲れる。

でも休んでいる暇はなかった。何者かの気配を察知した。神経を集中して…2人か…。
こっちに近づいている…

3

2

俺は飛び出して剣をその人物のど元に突きつけた。
そして驚いた。馬に乗ってたということではなく。

その人はオランポールの王女だったのだ。

第2話（後書き）

更新さぼってすいませんでした。

もつ月曜から学校なんでさらに更新の頻度は落ちるかも…><

第3話

「……えーっと……」

ものすごく気まずい空気が流れた。

一国の王女に剣を向けてしまったのだ。
死刑になってもおかしくないだろう。

「………とりあえず剣をおろしてくれない？」

王女が言った。

俺は言われた通りに剣をおろした。

「……一つ聞いていいか？」

俺はためらいがちに口を開いた。

「なんでこんなところにいるんだ？城から抜け出してきたのか？つていつか名前なんだっけ？」

王女は呆れたように俺を見た。

「あなたはこの国の王女の名前さえ知らないのですか？」

「あーまーそれはいろいろあってね……」

王女はため息をつく

「私はこのオランポールの王女アーシェ・ヴィクトリア。隣にいる騎士は私の護衛のレインよ」

隣にいる真つ黒な鎧に身を包んだ騎士レインは微かに頭を下げて会釈した。

そして王女…アーシエは続けた。

「あなた、天使の子なんですよ？」

「……は？なんで知ってんの？」

アーシエはニヤッと笑うと

「秘密よ」

と言った。

さらにさらにアーシエは言った。

「私たちがあなたの仲間になるわ。いいでしょ？」

「……………は？」

「あら、言葉が難しかったかしら？」

「いやそついう問題じゃなくて。あんたを連れて行ったら俺が誘拐したみたいな話になんたる！？」

アーシエはああ、と頷くと

「何とかなるわよ」

とかなり無責任な発言をした。

「さあ行きましょうか！ね？」

俺はため息をついた。この王女様は意地でもついてきそつだ。連れて行くしかないんだろう。

あーこの旅は波瀾万丈な旅になりそうだ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5123k/>

悪魔の剣と聖なる少年

2010年10月17日01時57分発行